

特集「中国伝統色彩研究の今」

Special Issue: The Present of Chinese Traditional Color Studies

特集「中国伝統色彩研究の今」にあたって

Editor's Introduction, Special Issue: The Present of Chinese Traditional Color Studies

國本 学史

Norifumi Kunimoto

慶應義塾大学・共立女子大学・日本経済大学

Keio University, Kyoritsu Women's University,
Japan University of Economics

1. 特集企画について

本特集は、「中国伝統色彩研究の今」と題して、企画者と同世代的研究・教育キャリアを有する、中国の研究者5名の寄稿論文をまとめたものである。企画者が本学会誌で毎年参加報告を行っている「中国伝統色彩学術年会」における学術交流を元に、現在も企画者が研究交流を継続している研究者各位へ本特集への参加を要請した。本特集は特にテーマを限定せず、各参加者の専門性に委ねる形で論文の寄稿を求めた。上記の中国伝統色彩学術年会等において企画者が目にした、こんにちの中国の大学・研究機関における「伝統色彩」研究についての多様性の一端を、日本に是非紹介すべきと考えたことが企画立案の契機となっている。参加いただいた各位は、美術系大学で実技含めて教授される教員から、哲学や歴史など文献資料を中心とした研究を行われる研究者、博物館において実物の資料を管理される研究者まで、幅広い専門領域の専門家に参加をお願いした。中国は人口が多く、大学をはじめとする研究機関の数も多いため、研究の成果は幅広く示される。さらに近年は、海外の研究者との研究交流を通じて、多彩なアプローチによる研究が増加していると言って良い。残念なことに、日本の芸術学・美術史学研究にあっては、時代や領域を細かく限定して詳細に検討するディシプリンが多いために、学際的に「色彩」をテーマにした芸術研究への興味・関心が持たれにくい。そのため、こんにちの中国の色彩文化・芸術研究の成果が紹介される機会は少ない。企画者の不勉強もあり、関連研究の引用や参照も不十分な現状にある。幸いにも企画者は日本色彩学会に所属していることで、色彩文化研究という視点から本企画を構築する得難い機会を得られた。中国というと科学技術研究の発展が話題になることが多いが、人文学・芸術学研究においても研究者の多数・多様さという強みがあり、昨今は非常に幅広い研究が提示されている。伝統色彩研究においてもその様相は顕著であると言える。今回のような研究企画によって、「中国伝統色彩研究の今」の一端を読者に紹介することにより、日中両国における色彩文化・芸術研究の交流・発展に寄与することを期待している。

2. 特集における各論考の紹介

本特集の各論文を、企画者が以下に紹介する。

張樂氏は、西安美術学院のミクストメディア芸術専攻で教鞭を執られている。張氏は、日本における度重なる色材調査を通じて、中国と日本の近代絵画の色彩文化を比較し、東アジアの色彩と芸術様式の変化についても研究を進められている（当該の研究成果は、張樂『色彩と物性：伝統石色の東方絵画における立場・審美の再構成』、中国文連出版社 2023.12. を参照）。本稿は伝統芸術と現代芸術を融合して表現する張氏の視点が活かされている。「化粧」は、洋の東西を問わず、古代より人間の文化の一つとして存在することが言及される。本稿では、中国の伝統的な化粧方法、少数民族の色彩への着目から、中国絵画における化粧表現等を通じて、「化粧」の色等の象徴性等を、芸術家としての視点から考察されている。日本の赤鬼、中国の関羽や包拯（ほうじょう）といった人物の赤顔の表現について、東洋的な赤色のイメージとの関連を指摘している点は東アジアならではの着眼であると言って良い。

汕頭大学の陳彦青氏は、以前より哲学的な観点を持たれ、中国の伝統文化における色彩について考察を続けられている。陳氏は以前、文化・歴史研究において、「伝統」という言葉で単純化してしまわずに色彩を考える必要性について言及されていた。当該の指摘は、日本の「伝統色」について同様の着眼を持つ者として、企画者も首肯するものである。本特集において陳氏は、「文化的意蘊」に関わる色彩として、「天水碧」と「太師青」という2色を例に考察されている。本稿の中で、色彩の「自用」「他用」の観点が示されていた。色彩文化研究において、色というものは、後述する肖世孟氏の論考にもあるように、色相のみが意味を持つものではない。色彩には、受け手・鑑賞者側が感じる色相の象徴性や、発信者・提示側が他者に権威やイメージを想起させる含意等、複数の側面があるという視点は重要である。さらにそうした要素は、長い歴史を通じて形成される「意蘊」によって形成されるものであり、色彩・色彩語の示す意味やイメージは、長い歴史を通じてその意味や価値は不变ではなく変化するという視点は、当然の

ようで私達は見失しないがちな見方でもある。こんにちの私達は、特定の色にどこか固定的な意味を持たせているのではないか。

湖北美術学院中国伝統色彩理論研究センターに所属される肖世孟氏は、以前より概念的・歴史的な分析を通じて、中国の伝統色について考察されている。黄色が中国でなぜ尊ばれたのか、という主題は、中国同様に五色を用いながらも、黄色がそこまで重要視されていない日本との文化的な差異として興味深い。とはいって、日本の天皇の黄櫨染の袍が、唐代の皇帝の常服に由来することが述べられている点は、企画者も以前「黄櫨染色の特殊性」(『日本色彩学会誌』44(3) 2020.06, pp.200-203)において言及しているように、日本で黄色系の色が軽視されてはいない事実も指摘される。肖氏の論考では、中国における黄色の尊重の理由を色相だけに求めず、五行と方位や、中国の地の性質との関連から見た考察のもと、「中」の位置への尊重という視点が提示された。現代的な色相・色味の分析からだけでは、なぜ黄色がそれ程中国で重要視されたのか、という歴史・文化背景を知る事は困難である。同時に、日本における唐文化の吸収という歴史的過程において、中国文化の受容が積極的に行われながらも、黄色が日本では中国ほど尊ばれなかった要因にも結び付く考察であると言える。

章新氏は、北京の故宮博物院に勤務され、明清の服飾を中心とした、実物の美術品の保管・展示・研究に関わっておられる研究者である。以前より、企画者とオンラインで日中の近世服飾における色彩の問題について話し合う機会を設けて下さっている。章氏は、「月白」色等や喪服における色彩の名称など、形容的色彩語が多くみられた清朝の服色について以前より言及されている点に企画者は注目しているが、本稿でもその着眼が活かされている。アニリン染料の登場と色相の変化は、同時期の日本における服色の変化にも通じる。東アジアという近隣の地域において、いわゆる「西洋的」な要素の流入により、東洋の色彩文化がどのように変化したのか、という比較研究の可能性を感じさせる内容で、日中における西洋からの輸入色料等の話題にも繋がる視点であると言って良い。また、本稿では「色」「彩」との意味の違いが言及されており、漢字文化圏で何気なく用いている「色」「色彩」「彩色」という語・文字の意味を、あらためて意識する必要性を喚起された。

北京聯合大学の曲音氏は、本稿で唐代女性の服色について考察された。曲氏は、企画者と共に日本色彩学会2021年度学術コラージュ研究助成「日中の服飾文化における位色やかさね色の共通性と相違」が採択された研究者でもある。本特集の論考は直接的ではないにせよ、当該助成による研究成果の一つ

と言える。研究助成への還元として、当該研究が日本色彩学会に寄与すれば幸いである。曲氏による考察は、中国唐代の貴族女性の礼服の「青」についての着眼が示されている。本稿で述べられる通り、「青」という漢字が有する色相の多様さは、古代の青の色相について語る難しさを示すと言える。企画者も以前、青と緑について述べたことがあるが、曲氏の論考では、黒色の要素など、青という漢字が持つ色相についての分析が精緻になされている。さらに、宮廷における官位色としての青と、庶民の衣服の色としての青、貴族女性の服の青、という対比は、東アジアの服色・位色を考えるに際して非常に重要な視点となる。日本における位色も同様に、こんにちの私達が考える色相と当時の「色」がどの程度異なっているのか、ということについて、文献・絵画資料等を丁寧に読み解く態度が必要であることを喚起された。また、各執筆者によって示された、象徴・意味を示す色とその変容が生じることについて、改めて考える観点がもたらされた。

3. 特集の意義

近隣の地域を横断して、色彩文化を比較研究することは意義深いと言える。しかし、中国伝統色彩研究については、日本からは言語の壁があることに加え、中国の研究領域と専門性の多様さがかえって徒となり、日本で中国の研究成果が紹介されることは少ない現状がある。紙幅の都合の他、企画者の國本の力不足もあり、今回はより多数の研究者を紹介することがかなわなかった。同様の特集企画等を通じ、中国の色彩文化研究等の動向を紹介する機会を今後も持ちたいと考えている。東アジアにおける色彩文化は、漢字という文字の共通性の他、近代期に「西洋」の色彩論を受容して変化した共時的な関係性がある。一方で、同じ文字や要素を持ちながらも、歴史・文化的な差異によって異なる意味やイメージを持つようになつた色もある。色彩の観点から歴史・文化の比較研究を行うことで、ファッションやデザイン等の研究領域にも新たな視点を提供できると期待している。

この度、漠然とした企画内容にも関わらず、快くご参加いただき、それぞれ優れた知見をご寄稿いただいた研究者各位に深く感謝申し上げる。中国語原稿の日本語翻訳を手掛けてくださった、本特集寄稿者でもある曲音氏に深く御礼申し上げる。日本語表現の不備等の責は、監訳の國本にある。また、長期間の準備期間を下さった学会誌編集委員会にも、あらためて感謝を申し上げる。

特集「中国传统色彩研究の今」

Special Issue: The Present of Chinese Traditional Color Studies

紅粧, 粉飾: 生活と芸術中の葛藤

"Red Makeup" and "Apply White Powder": The Entanglement of Life and Art

張 樂

Zhang Le

西安美術学院

Xian Academy of Fine Arts

キーワード: 紅粧, 粉飾, 葛藤

Keywords: red makeup, apply white powder, entanglement

序

2017年2月, 寒さの厳しい冬に, 私は貴州省での調査中に, 村の儀礼の現場から帰宅する数人の女性たちと偶然出遇った。この光景は, 心の奥底に永遠に焼き付けられたイメージ(図1)となり, 赤い化粧を施した女性たちが私のそばを通り過ぎた瞬間の感覚が, かすかに記憶に残っているようだ, いながら, はっきりと現実味を帯びて感じられる。今回, 私は「赤い化粧, 粉飾」と題し, 生活と芸術における色彩の関係について, あらためて考察を試みたい。



図1 2017年代貴州考察 図源:筆者撮影

1. 第一節

1-1. 人類学者によれば, 古代に遡るにとどまらず, 今日においても辺境地域の多くの民族に刺青(いれずみ)の風習がみられる。刺青や文様の習慣は, 現代の私たちの化粧の様式とつながっており, 人類学の基礎をなすものである(図2)。しかし問題がある。化粧は人類文明の水準を表すものではない。未開で蒙昧な時代において, 人々が化粧に注ぐ細心や, 色彩の鮮烈さは, ある種の「審美」の認識をはるかに超えていたことが知られている。



図2 古代民族のタトゥー現象

では, 化粧に用いられる色彩の起源についてであるが, 人類がこれを用いるにあたり, 古代から当然ながら人類学的に言えば「身の回りにあるものをそのまま利用する」という原則に従った。アジアにおける赤色の起源として, 蘇芳, 茜草(中国・インドの), 赤根(日本), 紅花などの植物から鮮明な赤色を抽出できたほか, 果実, 種子, 生物体などからも赤色を得ていた。しかし, 植物由来・生物由来の色素は揮発しやすい性質を持つため, 古代から今日に至るまで, 山岩, 土, 海中物質などの鉱物が広く使われてきた。こうした鉱物は性質が安定しており, 国内外の博物館に所蔵されている赤色物質の多くも, 鉱物の粉末である。今日, よく知られている赤色の鉱物の起源とその成分としては, 辰砂(硫化水銀), 赤鉛(酸化鉄), 二酸化ケイ素, および炭酸カルシウムを主成分とする赤珊瑚などがある。これらは現実に存在するものであり, その色材の粉末は膠質の媒質と水とを調合し, 化粧や器物の装飾など, さまざまな社会的・生産的活動に用いられてきた。

1-2. 巫術や靈媒と関連する初期の化粧術において, ほぼすべての民族が赤, 白, 黒の三色をよく用いており, 特に赤色と白色が化粧において最も広く使われてきた。東方地域および東アジアの歴史において, 赤色は深い神秘主義的意味合いを持っている。これはもちろん硫化水銀(辰砂)の毒性や防腐作用と関連しており, 今日私たちが持つ常識でもある。祭祀や惡靈払いなどの儀礼において, 五官の周囲に辰砂の粉末を塗布する行為は, 人類の化粧の始まりとされることが広く知られている。『本草綱目』には, 辰砂は安神作用があり薬としても用いられ, また絵画の顔料としても使われることが記されていることは, 広く知られた事実である。多数の歴史的遺物にも, 辰砂が顔料として使用された痕跡が見られる。注目に値するのは, 漢代の馬王堆墓出土の帛画(図3)で

特集「中国传统色彩研究の今」

Special Issue: The Present of Chinese Traditional Color Studies

中国传统色彩の文化的意蘊の知覚

The Perception of Cultural Connotations in Traditional Chinese Colors

陳 彦青

Yanqing Chen

汕头大学

Shantou University

キーワード：文化的意蘊、知覚層面、中国传统色彩、天水碧、太師青

Keywords : cultural connotation, perceptual level, traditional Chinese color, Tianshuibi color, Taishiqing color

1. はじめに

中国の伝統色彩は、極めて豊かな文化的知覚の側面を持ち、世界のさまざまな文化伝統における色彩文化と比べて、体験的な差異が顕著である。体験と知覚の観点から見ると、中国传统色彩の体験において最も重要な要素の一つは、「文化的文脈」の中で生じる色彩知覚に内在する「文化的意蘊」である。この文化的意蘊は、色そのものが直接関連する歴史的・思想的背景を媒介として生じ、そこに発生する感情や意味が視覚的体験へと投影されることで、単なる視覚的知覚を超えた「感じ方の方向性」を形成する。言い換えれば、色を見るという行為が、背後の物語や価値観によって深く導かれるのである。しかし、この中国の色彩における「文化的意蘊」は、具体的にどのようにして生じるのか。長い歴史を持つ中国の伝統色彩の実践の中では、いくつかの色がそのプロセスを明らかにする手がかりとなっている。その中でも特に、「天水碧」と「太師青」という二つの色彩は、文化的意蘊の生成メカニズムを示す代表的な例といえるだろう。

「天水碧」と「太師青」という二つの色彩体験には、大きく分けて二種類の知覚の入り口がある。一つ目は、色相をただ体験・観察するのみで、その色彩の名称や背後に含まれる文化的内包について一切知らない状態である。これは「色彩の初体験」といえるものであり、受動的かつ視覚的な身体的知覚にとどまる。

もう一つは、色の名称を知り、その背景にある文化的な意味や由来について理解したうえでの体験である。この場合、色名に結びつく多層的な文化的情報がひとつの「知覚の集合体」として形成される。これは、知識と感性が統合された「能動的な色彩体験」といえる。このような文化的色彩においては、多くの場合、初歩的な受動的体験はほとんど無視されがちである。なぜなら、名称とその背後にいる豊かな物語が、視覚

的な印象を圧倒するほど強力な意味作用をもたらすからである。その結果、身体的な知覚を超えて、色は「意味の象徴」として機能するようになる。こうして生じる色彩の「文化的意蘊」の知覚は、以下の四つの知覚層面に分けて理解することができる。

「天水碧」と「太師青」という二つの色に具体的に着目すると、その文化的意蘊の知覚には、複数の層にわたる差異が存在する。文化的意蘊の知覚という観点から見ると、「天水碧」は「太師青」よりもはるかに豊かな深みと広がりを持っている。

第一の知覚層面である「直接的な象徴性」において、「天水碧」は南唐の後主・李煜（南唐最後の皇帝・りいく）に、「太師青」は北宋の宰相・蔡京（さいけい）にそれぞれ結びついている。この段階では、色が特定の歴史上の人物と結びつくという意味で、両者の情報的価値はほぼ同等であるといえる。第二の知覚層面では、色の生成状況や使用・流行の文脈が加わる。この層においても、両者は「偶然または儀礼から生まれた色」「宮廷文化に根ざした色」として、ほぼ同程度の文化的厚みを持っている。しかし、第三の知覚層面に至ると、その知覚の重みに差が生じ始める。「天水碧」は、李後主の雅な文人気質と結びつき、南唐の滅亡という悲劇的運命とともに語られる。一方、「太師青」もまた、蔡京の権力失墜、罷免後の失意、そして死後も故郷に葬られることがないという悲惨な結末と結びつくが、その物語は「個人の堕落と天罰」という道徳的教訓に収束されがちである。二つの色は、王朝の終焉を予感させる「天の示す兆し」（「天水」の文字通りの意味）として、「運命の前兆」や「讐緯（予言）的な色」としての側面を持つ。

第四の知覚層面において、「太師青」はもはや明確な層構造を伴うような深みのある感じ方を生み出すことが難しくなる。一方、「天水碧」はこの段階で、その知覚がはっきりと象徴的符号——すなわち李後主

特集「中国传统色彩研究の今」

Special Issue: The Present of Chinese Traditional Color Studies

黄色の尊厳性：文化の源流

The cultural origin of the Supreme Yellow

肖 世孟

Xiao Shimeng

湖北美術学院 中国传统色彩理論研究センター

Hubei Institute of Fine Arts,

Chinese Traditional Color Theory Research Center

キーワード：黄色、至尊の色、品服色

Keywords : yellow, supreme color, official costume colors by rank

1. 品色衣

中国古代の政治理想において、仁徳ある君主は「垂拱而治」つまり簡素な方法で社会の秩序を実現し、人々がそれぞれの地位に安んじることを期待した。衣服によって人間社会の秩序を定め、調和のとれた社会を実現しようとする考え方である。『塩鉄論・散不足』には次のように記されている。

「古くは、庶人は耄耋の老いたる者こそが絹を着用し、それ以外は麻や枲（カラムシ）のみであったため、布衣と呼ばれた。その後は、絹を裏に使い、表は枲で、直領で緯もなく、袍は縁なしであった。羅や紈（カン、しらぎぬ）・文繡（美麗な刺繡の布）を用いるのは、君主や后妃の衣服である」¹⁾。



図1 元 任仁発『張果老見明皇図』北京故宮博物院

このような理想の下に、「品色衣」制度が登場した。これは、官吏の品位に応じて着用する衣服の色を規定する制度である。正式な「品色衣」制度は隋煬帝の時代に始まり、大業元年（605年）に、五品以上の官吏は朱や紫を着用することを定め、下級官吏および庶民と区別した。品色衣制度は、服色によって官位の等級を明確に区別するものであり、その後、各王朝がこれを採用した。唐代以降、次第に定着し、制度化されていった。唐の建国当初は隋の制度を踏襲し、品色衣制度を制定した。唐高宗の時代になると、服色制度はさらに細かくなり、三品から九品、さらには庶民に至るまで、明確な衣服の色が定められ、品位ごとの服色が制度的に明確化された。元代の任仁発が描

いた『張果老見明皇図』は、唐玄宗李隆基が伝説の「八仙」の一人である張果老とその弟子と会う様子を描いた作品である。元代のこの絵画が唐代の品色衣制度に則っているならば、玄宗以外の周囲の随行官たちの官位や品位も、服装の色から一目瞭然であろう。

隋唐時代に制定された品色衣の規定により、九品の官吏はそれぞれ異なる服色を着用し、全く重複することがなかった。社会のすべての構成員の身分的階層、大小の官吏の品位序列は、公卿などの高貴な者から庶民に至るまで、一目で明確にわかるようになった。服装の色を見るだけで、その人の貴賤や尊卑が即座に理解できたのである。紫の袍を着る者は榮華を極め、青い衫を着る者は貧しくて地味である。上下の間には、まるで天と地ほどの隔たりがあった²⁾。唐の時代の人々は、衣服の色を通じて社会の階級秩序を安定させ、明確な身分秩序によって各階層がそれぞれの立場に安んじるよう促した。これは明らかに大きな社会的進歩であった。このことについて、当時の詩人杜甫は「服色定尊卑、大哉万古程」と感嘆していた。

2. 黄色の至尊

黄色が至尊の色と見なされ、帝王の常服に専用されるようになったのは、実際には長い歴史的過程を経て、中国の隋唐時代に至ってようやく定着したものである。隋唐以前においては、正色の一つである黄色はまだ「至尊」の色ではなかった。人々は季夏（晩夏）にあたる時期に行われる「迎氣」の儀礼など、特定の場面でのみ黄色の衣装を着用していた。

黄色が至尊の色として確立した背景には、「品色衣」制度の実施が求められたことがある。隋の初めには、黄色に特別な意味はなく、皇帝も高位の臣下も庶民も、いずれも黄袍を着用して官府や朝堂に出入りしていた。隋煬帝の時代に至っても、天子と大臣がともに黄色の朝服を着用しており、身分の違いは服装の

特集「中国传统色彩研究の今」

Special Issue: The Present of Chinese Traditional Color Studies

清宮旧藏品に基づく織綾色彩に関する研究

Research on Fabric Colors of Court Regalia in the Qing Dynasty

章 新

Zhang Xin

故宮博物院

Department of Court History, The Palace Museum

キーワード：伝統色相、尚黄、清代藍染、紫色風尚、洋色

Keywords : traditional hue, revere yellow, indigo dyeing, purple fashion, western colour

1. はじめに

中国は絹の大国であり、東アジアに君臨した古代世界の織物の中心地の一つである。上古より、絹織物である彩錦や色帛は富と礼儀を象徴していた。上古の政治的典籍『尚書』には、舜帝が大禹に古代の制度について語り、「五采を以て五色に彰らかに施し、衣服をなす」¹⁾と記されている。また、周代の王礼においては、「璧は帛に配し、琮は錦に配し、琥は刺繡に配し、璜は黼に配す」²⁾といった色彩と素材の象徴体系が存在した。これらより、夏・殷・周の上古時代において、染色・彩色・刺繡・彩織などの技法がすでに高度に発展しており、礼制の構築に豊かな表現手段を提供していたことがうかがえる。一方で、『論語』に記される孔子の言葉「紫を奪う朱を悪む」や、「君子は紺緞を以て縁とせず、紅紫は便服ともなすなけれ」³⁾といった戒めは、歴史の流れの中で衣色表現がより多様かつ流動的であったことを反映している。韓非子はまた、春秋時代の齊において紫の流行が社会を席巻した状況を記録しており、齊桓公がついに紫衣の氾濫を戒め、自ら模範を示して反対するに至ったという。このように、衣服の色彩は個々の統治者や哲学者の意志によってその流れを変えることはできず、時代の変遷とともに新たな色彩表現が広く浸透していくことが明らかである。近年の秦始皇兵馬俑の色彩復元研究は、古人の衣装がいかに鮮やかで多様であったかを現代によみがえらせた。この研究成果は、王朝交代という歴史的大舞台においても、軍功による昇進や階層の変動が人々の衣装を一層豊かなものにしたことを示唆している。

古代の色彩表現がいかに豊かで活発であったかを考慮に入れても、これらの衣服の色や紋様が時と共にどれだけ残存しているかは疑問である。多くの場合、それらは古文書の文字の中に僅かにその痕跡を留めるのみであろう。古い色彩を探求する際、我々はしばしば文字史料や文学的情報に基づき、想像力と考証を通じて解釈を行っている。特に中国のように広大

な地域を持ち、悠久の歴史と多種多様な民族、そして王朝の交代が頻繁に起こった大きな背景の中では、文字による名称と実物との対応関係及びその変遷は非常に複雑で多くの変化があると言える。歴史における色の名前と実際の色相との対応関係を正確に理解するためには、より慎重かつ詳細な研究が必要となる。このプロセスは、単なる視覚的な再現を超えて、当時の社会的・文化的な文脈を理解するための重要な手段でもある。したがって、色彩に関する深い洞察を得るためにには、各時代の具体的な状況を考慮に入れた上で、文献資料と考古学的な発見を組み合わせた包括的な分析が求められるのである。

我々が豊富な色彩豊かな織りや、刺繡の衣服の文物や図像資料を有するとき、歴史典籍の記載が非常に限定的かつ粗雑であることに気づかされる。たとえ歴史的な詳細が記録に残っていても、それらは文物と対照的に調査されるべきであり、実際の文物に見られる色相は常に予想外の豊かさを持っていることが多い。故宮に所蔵されている織りや刺繡の衣服の文物はまさにこのような貴重な宝庫と言える。特に多色の礼服や吉服は着用頻度が比較的低く、さらに宮廷での保存量が大きいため、2,300年間にわたる織物の色彩が良好な状態で保存され、明清期以降の染織史の真の姿を明らかにしているのである。これらの文物は単なる視覚的な美しさを超えて、当時の社会や文化、さらには政治的な背景を理解するための重要な手がかりを提供しており、その色彩や模様は文字情報だけでは到底得られない深い洞察を我々に与えてくれる。このようにして、古代の色彩表現に関する我々の知識は大いに補完され、深化されることになる。



図1 清乾隆朝の五彩龍袍に織り出された華麗な海水紋

特集「中国传统色彩研究の今」

Special Issue: The Present of Chinese Traditional Color Studies

唐代における女性礼服の『青』

The blue color of Tang Dynasty women's formal dress

曲 音

Qu Yin

北京聯合大学

Beijing Union University

キーワード: 唐代, 女性礼服, 青色, 染色

Keywords: tang dynasty, female formal dress, blue color, dyeing

1. はじめに

唐代の女性の服飾は「多彩」であることで知られているが、貴族の女性が着用する礼服においては、特に青色が重んじられていた。『律令』に記載されている唐代貴族女性の朝服（具服）には、皇后・皇太子妃・公主・王妃・内外命婦などが着用する襢衣（きい）、鞠衣（きくい）、翟衣（てきい）、花釵礼衣（大衣連裳）などが含まれる。その中で深青色は皇后のみが着用を許されるものであり、最も高い身分を示していた。他の礼服も主に青系の色彩が用いられており、例えば親王妃の婚礼衣装¹⁾や内命婦・外命婦が養蚕や大朝会などの儀礼の際に着用する服装も青色²⁾であった。このように、青色はその濃淡によって身分の上下を表す重要な基準となり、色が濃いほど位が高く、品位が高いとされた。つまり、「青」は唐代の女性にとって、人生におけるさまざまな儀礼や行事において貫かれていた服色と言える。



図1 宋 佚名『宋人画徽宗皇后像』、台北国立故宫博物院

2. 「青」を着用する礼制の伝統

唐代の服飾文化がしばしば「開放的」「多様」と評価される一方で、その色彩体系、とりわけ礼服における「青」の使用は、あくまで厳格な「礼制」に基づいて構築されていたのである。

「青」は「五正色」の一つであり、唐代以前から中国古代の貴族女性の礼服において主要な色彩として用いられてきた。「五正色」という概念は春秋戦国時代に形成され、同時に「正服色」の考え方方が礼制に取り入れられた。『周礼』には最初に天子の「六冕」³⁾に使われる黒（玄）と黄（纁）の色が記されているが、王后が着用する六種の礼服⁴⁾には「黒・青・赤・鞠塵・白・黒」の色が組み合わせられ使用されており、正色の使い方には「主」と「補」の序列関係がすでに築かれていたと考えられる。「青」が高位の女性服色として用いられる伝統も、この時期に端を発していた。

漢代以降、貴族の女性が青色の礼服を着用する伝統は次第に定着し、制度化されていった。『続漢書・輿服志』には、「太皇太后および太后が養蚕の祭儀には上衣に青色、下裳に縲色を用いる」⁵⁾と記されている。また、西晋元康六年（西暦296年）の天子の詔書にも、「魏の以来、皇后の蚕服は純粹に青色を用いるべきである。これを永制と為す」⁶⁾と明記されている。隋代になると、皇后の襢衣や青衣をはじめ、その他の貴族女性が着用する褕翟についても、すべて青色を基調としたことが制度化された。王通が著した『中説・事君篇』においても「婦人は青碧を有す」⁷⁾と記しており、青色が女性礼服における正色として確固たる地位を占めていたことがうかがえる（図1）。唐代における女性礼服への「青」の使用は、直接的には隋代の制度を受け継いだものと考えられるが、実質的には周代に成立した服色の序列的体系を保存しつつ、それをさらに発展・強化したものでもあった。